HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北駕文庫蔵『鴨長明方丈記異本』
著者	徳永，良次
引用	北海学園大学人文論集，1：A1-A14
発行日	1993-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北駕文庫蔵『鴨長明方丈記異本』

徳永良次

一

明治四十四年に皇太子（大正天皇）の行啓を記念して設立された本学の北駕文庫に、「鴨長明方丈記異本」一冊が所蔵されている。北駕文庫は、本学の前身である北海中学校の校長浅羽靖（あさばしずか）によって設立され、明治四十四年以降も蔵書を追加し、現在ではおよそ三万一千冊に上っている。[1]

この北駕文庫については、大正三年に「行啓紀念北駕文庫蔵書畧目録」（第一巻）が発行され、同文庫蔵書の設立当時の全貌を知ることができる。[2] 目録によると、蔵書はその内容によって総数三十五に分類配架されていて、内訳は以下の通りである。

第一　詔勅　　第三　宗教
第二　神祇　　第四　經書
第五　國史　　第一九　工學
第六　漢史　　第二〇　科學
第七　外國史　　第二一　林學
第八　子類　　第二二　兵書
第九　文學及語學　　第二三　生理衛生
第一〇　詩文集策議　　第二四　水産
第一一　叢書　　第二五　辞書
第一二　地理　　第二六　美術
第一三　法律　　第二七　音樂
第一四　社會　　第二八　工藝
第一五　教育　　第二九　地圖
第一六　哲學　　第三〇　遊戯娯樂
第一七　農書　　第三一　雑書
第一八　商工交通　　第三二　黒田開拓長官

第三三　桂將軍　　第三五　圖書目録
第三四　小杉博士

さて、前述の「鴨長明方丈記異本」は、第三宗教の部に分類されており、「宗（3）／287／1」の分類ラベルが貼付けられている。この「鴨長明方丈記異本」は、いわゆる略本系統の長享本に属する古写本である。[3] 即ち長享二年の奥書を持ち、内容的にも「炎魔法王呵責」の一条を有するが、「折琴つぎ琵琶」の一条及び本文末の「墨染の」という歌、「桑門蓮胤誌之」という署名を欠いている。長享二年の奥書以降も彰考館本等と同一の書写奥書があるが、なお、同じ略本系統の延徳本、最簡略本に近い内容をも有しており、これら略本の関係を考察する上でも重要な資料であると考え、今回、全文を原本通りに翻字して書誌的解説を付し紹介したいと思う。

二

北駕文庫蔵「鴨長明方丈記異本」（以下、北駕文庫本と略称する）は、前述の目録には、「鴨長明方丈記異本　寫　一　文政」と記されているが、北駕文庫本についての詳細な解説は記載されていない。[4] 原本の体裁・法量等の書誌的事項は、以下の通りである。

北駕文庫本「鴨長明方丈記異本」一冊

○江戸時代文政十一年写、冊子本袋綴明朝装、斐紙、印記アリ、「北駕／文庫」、「明治卅十四年／八月辱／臨御仍建／文庫傳光／栄於無窮」（以上朱方印）、「大橋」（朱長円印）、匡郭（四周双辺）、墨界線アリ、界高十、二糎、界幅一、五糎、一頁九行、一行約十三字、墨付十二丁、朱色原表紙、縦二十三、八糎、横十六、四糎

（表紙）「鴨長明方丈記異本　全」（題簽）
「宗（3）／287／1」（ラベル）
（見返）「宗（3）／287／1」（表紙のラベルに同じ）
（内題）異本方丈記
（奥書）
写本者長享二戊申十二月於宇多福西
本願院拽老眼雖為寒可香筆禿
亀鳥跡氷堅依為大功写之者
也　　佛子莫源
又次云
于時天文八己亥年正月二十五日於

桃尾安楽院南窓也

隆忱

又次云

右之本喜多院源春坊隆

堅得也後見之人々五字一

之御回向奉馮者也

寶生院　信盛書

慶長二十年菊月下旬

文政十一（戊子）季臘（ママ）月廿六日（擦消）

以上、北駕文庫本についての書誌的事項を示したが、若干の補足説明を加えておく。

保存状態は、比較的良好で虫損や汚損は殆ど見られない。表紙や綴糸もおそらく当時のものであると考えられる。北駕文庫は過去水害に遭って、かなりの蔵書が水没したが本資料は幸い水没を免れたようである。

体裁についてみると、本資料の縦の長さ二十三、八糎に対して、界高が十、二糎と半分以下なのは、近世の絵入りの版本のように上段が空欄、下段に界線を印刷した料紙を使用しているからである。その料紙の下段の界線の部分に本文を書写している。上段はすべて空欄のままになっており、初めから本文だけを書写したのか、後で上段に絵などを入れるつもりであったのかは不明である。

次に、奥書についてみると、北駕文庫本は長享本系統に属していることは明らかである。中でも彰考館本[5]・故吉沢義則博士旧蔵本[6]と「慶長二十年菊月下旬」の奥書まで一致している。特に彰考館本と比較してみると、北駕文庫本の誤写と思われる箇所を除けば、すべて一致していることから、同一祖本もしくは同系統の本を書写したと考えられる。また、北駕文庫本を書写した人物の名前の部分だけ擦り消した形跡が認められる。これが何時どのような事情で消されたのかについては不明である。

本資料が、いつ北駕文庫に収められたかについては、前述の「行啓紀念北駕文庫蔵書署目録」（第一巻）には既に登録されているので、この目録の発行された大正三年には北駕文庫に入っていたことは明らかである。さらに、本資料に押されている印記の一つは、明治四十四年に皇太子（大正天皇）の行啓を記念して文庫を設立した旨が記されているものであって、行啓当時（明治四十四年）までは遡ることができると考えられる。本文の初めに押されている印記の中に、前の所蔵者とみられる「大橋」という朱印が押されているが、これについては未勘である。これ

らの点については、北駕文庫の中に設立者である浅羽靖に関する資料も残されているので、今後さらに調査・検討を加えて行きたい。

三

最後に、北駕文庫本の本文・語句と他の略本との異同について検討を加えてみたい。略本は本文の内容および奥書によって三つの系統に分かれるのであるが、それぞれの先後関係などは未だ充分解明されていない。次にそれぞれの略本の特徴を整理して示すこととする。

(1) 長享本

長享二年の奥書を有し、内容的には「炎魔法王呵責」の一条を有するが、「折琴つぎ琵琶」の一条及び本文末の「墨染の」という歌、「桑門蓮胤誌之」という署名を欠いている。

(2) 延徳本

延徳二年の奥書を有し、長享本とは逆に、「折琴つぎ琵琶」の条及び本文末の「墨染の」という歌、「桑門蓮胤誌之」という署名を有するが、「炎魔法王呵責」の一条を欠いている。

(3) 最簡略本（真字本）

この系統の本は、現在知られているのは故吉沢義則博士旧蔵の変体漢文で記された一本のみである。内容的には長享本、延徳本に有する特徴をすべて欠いており、略本の中でも最も簡略な伝本である。

北駕文庫本は、奥書・内容ともに明らかに（1）の長享本に属するものであり、特に奥書についてみると彰考館本と極めて近い関係を有する写本であることが判る。しかしながら、以下に示すように本文の語句をみていくと、必ずしも長享本系統の伝本と一致しない点もあり、現在残されている略本間の関係を明らかにするために重要な資料であると考えられる。初めに長享本系統の内、最も関係の近い彰考館本との異同を示すこととする。

○彰考館本との異同

身の定なき事を	北駕文庫本（八オ）9	
身の定なきなとを	彰考館本	

雲のとゝめかたきになして　北駕文庫本（八ウ）1
雲のとゝめ・・・・・・・・　彰考館本

倦けれはおのつから休み　北駕文庫本（九ウ）6
倦ぬれはをのつからやすみ　彰考館本

心さし一つならねは　北駕文庫本（十ウ）9
志一ならすは　彰考館本

右に挙げた異同は、主として彰考館本の独自異文の部分である。長享本系統の伝本の中で、北駕文庫本と彰考館本のみに共通する語句（表記が異なっているものも含め）及び欠落部分等は多い。それにも関わらず、奥書が一致している両者でこのような語句の異同が存在するのは、彰考館本を書写した際の誤写か、両者の依拠した祖本に既に異同が生じていたか、どちらかである。つまり、北駕文庫本は他の長享本系統の伝本ないしは他の系統の略本の本文と一致しているのにもかからわず、彰考館本のみ異同がみられるのが右に挙げた例である。

○長享本・延徳本との異同〔7〕

経巻何巻と定めす　北駕文庫本（九ウ）9
経巻何巻とさゝす　長享本
・・・・・・・・・・　延徳本（この部分なし）
誦―経幾―巻ト不レ定　最簡略本

斯のことく冨る人は　北駕文庫本（十ウ）7
かれかことくとめる人は　長享本・延徳本
如レ其ノ冨ルー人　最簡略本

生ゝ世ゝの父母師長を助け　北駕文庫本（十一オ）8
世ゝ生ゝの父母師長をたすけ　長享本・延徳本
生―々世―々之扶二父―母師―長ヲ　最簡略本

右の例は、北駕文庫本が長享本系統でありながら、なお他の長享本および延徳本などの略本と一致しない箇所を抜き出して示したものである。さらに他の略本と一致しないばかりでなく、最簡略本の本文と良く似ている部分でもある。特に最後に挙げた「生ゝ世ゝの父母師長を」という箇所は、他の長享本・延徳本はことごとく「世ゝ生ゝの父母師長を」となっており、北駕

文庫本と最簡略本のみが共通して有している独自表現である。

加えて、後掲の翻字本文を見れば判るように、北駕文庫本の本文には漢字表記された語が非常に多い。これは転写した人物の表記意識、祖本に忠実であるかどうか等の転写の態度によって大きく変わるものであるし、祖本が既に多くの漢字を交えた本文を有していた可能性もあり簡単に結論を出すことはできない。しかしながら、現存する写本を見る限り、北駕文庫本は変体漢文で記されている最簡略本に近い表記様式を持っている。(8)

以上、簡単に北駕文庫本の書誌的事項と他の略本との異同について紹介をかねて検討を加えてきた。まとめとしてもう一度繰り返すと、北駕文庫本は、彰考館本と奥書・本文ともにほぼ一致しており、いわゆる長享本系統の伝本であることは間違いないが、なお語句の異同・表記様式などをあわせて考えると、真字本の最簡略本と関係する可能性もあり、両者の中間的形態を示している。本資料は、「方丈記」略本の系統を考える上で重要な資料であると考えられる。

注

(1) 一九九三年度、北海学園大学便覧によると、三万一千百三十七冊。大正三年北駕文庫が財団法人として認可を受けた際には四万二千冊であったとの記録があるが、正確な蔵書数は不明である。

(2) 「北駕文庫蔵書畧目録」(第一巻)の緒言には次のように記されており、この目録以外にも蔵書のあることが知られる。

一、本目録ハ創立以后第一次ノ印行ニシテ総テ簡畧ニ従ヒ只其蔵書ノ大体ヲ示スノミ

一、蔵書ノ中二部以上アルモノハ単ニ其一ヲ掲グ

一、板木内外ノ区別ハ印刷区分欄ニ其頭字ノミヲ記ス

一、洋書及ヒ雑誌類ハ第二巻ノ印刷ニ譲ル

(筆者注―第二巻は未刊)

一、部類ノ編入ヲ誤レルモノ未タ少ナシトセス他日ノ訂正ヲ俟ツ

一、蝦夷地開拓ニ付テ幕政ノ時代ヨリ大ニ探検ニ勉メ拓殖ニ盡粋セラレタル松浦武四郎翁ノ門ヲ設ケント欲スルモ未タ編集ノ秩序定マラサルヲ以テ暫ラク第二版ニ譲ラントス

(3) 「方丈記」諸本については、山田孝雄博士、簗瀬一雄博士、青木伶子氏を始めとして多くの先行研究を参考にさせていただいた。

(4) 注(2)緒言の第一条参照。

(5) 原本戦災により焼失。

(6) 現在、若林正治氏蔵

（7）ここで言う長享本・延徳本の本文は、主として注（3）青木伶子氏の「広本略本方丈記総索引」（武蔵野書院）の本文を参照させていただいた。

（8）但し、最簡略本のように返読を伴うような部分は存在しない。

翻字凡例

一、次に記す本文は、北海学園大学付属図書館北駕文庫蔵「鴨長明方丈記異本」（分類番号「宗（3）／287／1」）の全文を原本通りに翻字したものである。

一、他本との本文・語句の異同を調べる際に便利なように、（一オ）のように丁数と行頭に123などと数字をおいた。

一、本文に使用された漢字は、できるだけ原文通りとした。また、仮名についてはしばしば「ハ」「ニ」などのように片仮名が交じっているが、これらはすべて現行の平仮名に戻した。さらに、「あらず」などのように所々濁点を付した箇所があるが、これらは原本通りに翻字した。

一、繰り返し符号については、「ゝ」「〻」はすべて「ゝ」に統一し、二字以上の場合の「〳〵」は原本通りとした。

一、本文の最後に翻字注を置いた。これは、北駕文庫本の明らかな誤字・脱字（文）について記すものであって、他の略本との校異を示したものではない。

一、翻字注の本文における所在の示し方は、翻字本文の丁数と行頭の番号による。

（一オ）

1 異本方丈記
2 行河のなかれは絶すしてしかもも
3 との水にあらすよとみにうかふう
4 たかたのかつ消へかつ結ひて久敷
5 とゝまる事なし世間にある人の住
6 家もまたかくのことしもろ〳〵里〳〵
7 にむねをならへいらかを争へる
8 貴き賤き人のすま居は世ゝを
9 経ても尽せぬものなれは昔

（一ウ）

1 ある人は今はなし或は去年栄
2 へてことし亡ひ或はきのふ作
3 りてけふ焼ぬ住む人是に同し
4 姿も替らずふるまひも同し
5 ければ古へ見し人は百人か中
6 にわつかに獨ふたり残れり或は
7 詞を交へ契を結ひし人も
8 浅茅か原の露と消へ或は名
9 を聞姿を見し人も蓬かも

(二オ)

1 との塵と成又朝に生れ
2 夕に死するならひ唯水の上の
3 うたかた也その主と住家と無
4 常を争ふさま槿の露に同
5 し或時は花よりさきに露こ
6 ほれある時は露より先に花
7 しほむ主さき立て家残る
8 もあり主よりさきに亡る家
9 も有といへは愁ひならぬ時は

(二ウ)

1 稀也若きをさきたてゝ袖
2 をしほる老人もあり親に後
3 れて河次にさすらふみなし
4 こ契りを結ふ夫妻に別
5 れて此目のかたらひ空しく
6 頼をかくる主君を失ひて
7 眷顧の思ひあらたまるともに
8 あひむかへる時にはかれを心を
9 つゐやす貧しきものはちか

(三オ)

1 らあらん事を望み冨る者は
2 財のうする事を歎くといへ
3 とも心に叶ふ事なし此故に有
4 につけても患ひなきにつけても
5 うれへすと云事なしまた
6 わつかに是かなへはかれ缺る
7 事をなけき彼是同く有
8 る事を思へ共思ふにしたかふ
9 事なしかやうに歎きつゝ一生

(三ウ)

1 はつくるといへ共希望は盡ず
2 つら〳〵是を思ふに家あれは
3 焼失の恐れ有妻子あれは
4 はくゝ■(ま)む思ひ有眷属あれ
5 は心に順はさる恨あり宝あれは
6 盗人の憚あり田畑あれはお
7 ほやけにつけてあやふみ有
8 すべてたかき人にはしたかはむと
9 おもひくたれる人をばした

(四オ)

1 かへむとはけむ凡やすき処なし
2 いつくにか此身をやとさむいかに
3 いはんや只此世斗りの苦にし
4 て後の世のおそれなくはさて
5 もありなむ傳へ聞人一日一夜

6　をふるに八億四千の念あり
7　其念〻の内になす処皆三途
8　の業と云りかの三途におもむき
9　なん事は久しき事にかは只一つの

（四ウ）

1　息二つの眼閉るを待はかり也
2　あらきつかひにおはれ闇き
3　道に向はん時眼にさへきるものは
4　牛頭馬頭のいかる姿耳に
5　聞ゆる物は炎广法皇のけし
6　き詞姿閻浮にありし時諸
7　教の流布は見きや見さり
8　きや知識の教をば聞やき
9　かさりきやもし聞なから信

（五オ）

1　せずして爰に來れるものな
2　らは誰をかこち何ものを
3　恨む成功そのかみより汝いく
4　たひか我等か手にかゝりて
5　苦を受し吾幾度か汝に
6　來るなとあつらへしみつから
7　苦の種を植て苦敷処に
8　来る事患の中の愁なり
9　夏の虫の火に入てくゆるか

（五ウ）

1　如し尤愚也と人皆是を
2　知るといへは朝の露のかゝれ
3　るほとをうらみ野原の風
4　の絶さる間をほこり此世も
5　苦敷事を望み後の世は
6　おそろしき態をいとなむ
7　成へし爰に我深き谷の
8　ほとりに閑なる林の間にわつかに
9　方丈なる草の庵を結へり

（六オ）

1　竹の柱を建刈萱をふき
2　松葉を囲とし古木のかわを
3　敷物とせり傍に筧の水を
4　湛たり東南の角五尺には
5　蕨のほとろを敷て夜の
6　床としさゆる霜夜に身を
7　あたゝめ西南の角に窓を明け
8　て竹のあみ戸を立たり西の
9　山端をもるに便有西南

（六ウ）

1　の角五尺には竹の簀の子をし

2 けりあみたの絵像を安置
3 せりそばには棚をかまへ往生
4 要集ことときの文書を少ゝ
5 おけり此庵を作るに巧匠
6 をやとはされはみつからむすふに
7 たてたり又心の移るにまかせ
8 て志あらんとすれともあたらし
9 き蓋もなし程ちいさしとい

（七オ）

1 へとも一身をやとすにせば
2 からすたとひ是よ廣しとも
3 誰をかやとし何物をか置ん
4 沢の根芹を摘み峯の菓
5 を拾有るにつけて用ひ
6 麻の衣藤の衣得るに順ひ
7 て肌をかすくあなかちに
8 惜き命ならねは粮の尽
9 なむ愁も■（×思）思はす人に

（七ウ）

1 交る身ならねは姿を恥る
2 悔もなし報ふへき力なけれは
3 人の恩も願はしからす名聞を
4 思わされば誹る人も恨めしから
5 す若なすへき事あれば則
6 己の身を仕ふものうからぬ
7 にはあらねと馬鞍牛車と心を
8 悩すよりやすし今一身を
9 わかちて此用をなす手の

（八オ）

1 奴足の乗輿是余心に叶へ
2 り苦き時は休め時〳〵はつかふ
3 つかふ迚もいたはしからす物
4 うしとてもかさらすいはんや
5 よのつねのふるまひならねは
6 何ゆへにかさしもいとなみ身を
7 苦ん只常には世のはかなき
8 事を朝の露消やすきに
9 たとへ身の定なき事を夕

（八ウ）

1 の雲のとゝめかたきになして
2 有につけ無につけてあなかちに
3 諂ひ求る業なし志す道
4 深けれは徒然なる愁もなし
5 谷の清水峯の木立眼を
6 悦しむるとも也風聲虫の音
7 耳に順ふ力也春は鶯の聲を

8　鸚鵡の囀と聞夏は時鳥を
9　聞かたらふ事とも四手の山路

（九オ）

1　を契る秋はくまなき月の
2　影に満月の顔ばせを思ひよる
3　冬の嵐にまかふ紅葉をば常
4　ならぬ世のためし也と見殊更
5　無言せされ共獨居は口業
6　を乱る事なし禁戒を守
7　らされ共境界なければ何に
8　つけてか破らんもしかふばし
9　き友の柴の戸を抑て来

（九ウ）

1　入は往事をかたらひ来縁を
2　契る夫世間利養の為に
3　契らず只菩提の真の善知
4　識のためにかたらふ心を佛を
5　念し手に経巻を採るに妨
6　る人もなし倦ければおのつから休み
7　おのつからおこたるにはづへき人も
8　なし心いさめば又勤む念仏
9　何篇と定めす経巻何巻と

（十オ）

1　定めす名聞の為にせされは
2　人を飾る事なし檀那を
3　祈らされは験なき事をうらみず
4　但みつから讃毀心を發し信教
5　の思ひにならむ事をまつはかり也
6　方丈の居処楽しき事かくの
7　如しかやうの事又人に向ひて
8　云には非す只身にとりて心の引
9　かたなれは原憲か百綴顔子

（十ウ）

1　の一瓢の跡を思ふ斗也若人
2　是を疑しく思わゞ魚と鳥との
3　情を見よ魚は水にあかず鳥は
4　林に飽ず魚にあらされは水の
5　住よき事を知らす鳥にあら
6　されば林の願わしき事を知らす
7　斯のことく富る人は賤しきふる
8　まを苦しと見まづしき人は
9　富を苦と見心さし一つなら

（十一オ）

1　ねばふるまひも同しからず今方
2　丈の草庵我心に叶へり故に万

3　物をゆたかにしてうれはしき事なし
4　いかにいはんや一生夢のことくにはせ
5　過て迎の雲を待得て菩薩
6　聖衆に肩を並へ不退の浄刹
7　に詣しつゝ如来の要蔵を破て
8　功徳の正財豊にして生ゝ世ゝの
9　父母師長を助け六道四生の

（十一ウ）

1　群類を引導せん事いくはくの
2　たのしみそや
3　写本者長享二戊申十二月於宇多福西
4　本願院拽老眼雖為寒可香筆禿
5　亀鳥跡氷堅依為大功写之者
6　也　佛子莫源
7　又次云
8　于時天文八己亥年正月二十五日於
9　桃尾安楽院南窓也

（十二オ）

1　隆忱
2　又次云
3　右之本喜多院源春坊隆
4　堅得也後見之人々五字一
5　之御回向奉馮者也
6　寶生院　信盛書
7　慶長二十年菊月下旬
8
9　文政十一戊子季(ママ)臘月廿六日(擦消)□□□之写

【翻字注】

一ウ1「ある人は」――延徳本「ありし」、長享本「ある」
二ウ3「河次」――延徳本「路頭」、長享本「路次」
二ウ8――長享本には「かれを」の後に「はくゝみやしなはんと
　さま〳〵の」とあるが、原本脱
三ウ4「はくゝ■む」――墨消の右に「ま」補入
四ウ6「姿」――長享本「汝」
五オ3「成功」――長享本「成劫」
六オ7「あたゝむ」――「め」の右に「む」補入
六オ9「山端をまもるに」――「ま」補入
六オ9「西南」――長享本「西北」
六ウ9「蓋」――彰考館本「益」、延徳本「難」
七オ2「是よ廣し」――長享本「是よりひろし」
七オ9「■思はす」――上の「思」字、墨消
八オ3「つかふ迚も」――長享本「つかふとても」
八オ9「定なき事を」――彰考館本「なと」、小川本「事」
八ウ1――彰考館本「かたきになして」の部分なし

十ウ6――延徳本、長享本「ねかはしきを」
十ウ7――延徳本、長享本「かれかことく」、最簡略本「如其ノ」
十ウ8「ふるまひ」――「ま」の右に「ひ」補入
十一オ8――延徳本、長享本「世ゝ生ゝ」、最簡略本と原本同じ

"KAMONO-CHŌMEI HŌJŌKI IHON" GARNERED IN "HOKUGA COLLECTION" OF THE HOKKAI GAKUEN LIBRARY.

TOKUNAGA Yoshitsugu

SUMMARY

This paper is a reprint of the "Hōjōki" written by Kamono-chōmei, which is garnered in the "Hokuga Collection" of the Hokkai Gakuen University Library, with a bibliographic explanation. It is clear, among the "hōjōki-Ryakuhon" group, "Hōjōki" in "Hokuga Collection" has the closest relationship with "Chōkyō-bon" group, especially the "Shōkōkan-bon", through examination of its postscript and text. However, verifying wards and the form of description adopted in the "Hōjōki" in "Hokuga Collection", it is inferred that it might also relate to the "Saikanryaku-bon", which belongs to another group. Therefore, the "Hōjōki" garnered in "Hokuga Collection" might be intermediate between the "Cyōkyō-bon" group and the "Saikanryaku-bon" one. The "Hōjōki" garnered in the "Hokuga Collection" is regarded as an important material to elucidate the genealogy of "Hōjōki-ryaku-hon".